「牡丹灯記」と『牡丹亭』

氏岡真士

キーワード：牡丹灯記・剪灯新話・瞿佑・牡丹亭・湯顕祖

本稿は、単純な疑問に発している。「牡丹灯記」（瞿佑『剪灯新話』巻二）は、なぜ牡丹をタイトルにしているのか。なぜ牡丹が作品中に登場するのか。また湯顕祖『牡丹亭還魂記』の場合は、どうであろうか。こうした疑問を振り出しに、さらにはそれらの関わりを考えることがどんな意味をもちうるのか、についても述べてみたい。

一　双頭の牡丹

「牡丹灯記」は、『剪灯新話』のなかでもよく知られた作品のひとつであり、その素材についても諸説ある。たとえば『太平広記』巻三百三十四にみえる「王元之」は、〝王元之という者が死んだ女（高密の令の死んだ娘という）と親しくなった話であるが、その夕方門外に立っていると婢を従えた美人が西方からやって来るといい、声をかけると美人が男の家に至るといい、夜毎に訪ねて来て情愛が深くなるといい、女の家がどこだかわからないといい、女の実は死んだ女で婢もまた木主であるというなど、全く同趣向である〟（近藤春雄『唐代小説の研究』笠間書院、一九七八年）。あるいは南宋の洪邁『夷堅志』（甲志巻八）に収める「京師異婦人」は、〝主人公と鬼女との出会いが元宵節であること、鬼女が道士の護符の力で折伏される結末など、「牡丹灯記」がこの話を骨子として、それに潤色を施したものであると見て間違いないであろう〟（竹田晃ほか『剪灯新話』明治書院、二〇〇八年）。さらには橋本堯「亡霊との交わり」（『吉川博士退休記念中国文学論集』筑摩書房、一九六八年）のように、もぐり売春との発想的関係も指摘されている。これらの説によるなら、そこに牡丹の提灯は出てこないから、瞿佑は何らかの意図で新たにこの要素を「牡丹灯記」に盛り込んだと考えられるだろう。

藍本はほかにも指摘されている。それは南宋の羅燁『酔翁談録』（壬集巻一、負心類）にみえる話で、〝張という男が元宵節の晩、紅綃（あかぎぬ）の帕子（ハンカチ）を拾ったことが縁で、節度使李公の側室の李氏という美女と知り合い、二人で駆け落ちするが、最後は李氏を裏切り、名裁判官、包拯に裁かれるというもので、相手が人か幽霊かのちがいはあるが、この「牡丹灯記」の筋とよく似たところがある。特に、男が李氏にはじめて会った時、その車に「双鴛鴦灯」がかけてあったというのは、こちらの「双頭牡丹灯」をすこぶる思わせるだろう。この「紅綃密約、張生負李氏娘」の話、宋代の民間日用百科事典『歳時広記』には、「鴛鴦灯伝」の題で収められており、当時はなはだ有名であったらしい。「牡丹灯記」はこの「鴛鴦灯伝」の幽霊版といってもよいであろう〟（金文京『中国

小説選』角川書店、一九八九年）。「鴛鴦灯伝」の話は『歳時広記』巻十二「上元」下の「約寵姫」の項に略説されている（なお次の「惑妖女」の項には、『夷堅甲志』からとして先の「京師異婦人」が紹介されている）。この場合、つがいの鴛鴦は仲睦まじさの象徴とされるから、双頭の牡丹も同様の発想ということになろう。そもそも唐よりこのかた、華やかな牡丹の花は熱狂的な人気を博したから（李樹桐「唐人喜愛牡丹考」（『唐史新論』台湾中華書局、一九七二年）、斉藤茂「李商隠「牡丹」七律をめぐって」（『中国詩文論叢』第二・三・四集、一九八三～一九八五年）など参照）、小正月の飾りものとしてもふさわしい。

ただ双頭という点に着目しつつ「牡丹灯記」に即して考えれば、またべつの意味合いも考えうる。前述の竹田晃氏らは、鬼女の執念やそれを折伏する宗教の法力といった観点から「牡丹灯記」と〝白蛇伝〟は軌を一にするとも指摘しているが、後者においてはアルビノの蛇という異形が、敵役とされていた。では双頭の牡丹という異形にも、そういう要素はないであろうか。太刀川清『牡丹灯記の系譜』（勉誠社、一九九八年）が指摘するように、「牡丹灯記」で符麗卿に魅入られて幽鬼となり明州のまちを騒がせた喬生は、つぎのような反省の弁をのべている。

不能效孫生見兩頭蛇而決斷，乃致如鄭子逢九尾狐而愛憐。
（孫叔敖が両頭の蛇を切り殺した故事にならえず、鄭六が任氏を愛した真似をしてしまいました。）

両頭の蛇や九尾の狐（任氏の正体）も異形であって、それは不吉なものと見なされている。とすれば双頭の牡丹もまた、そのような意味合いを含んでいるであろう。じっさい「牡丹灯記」では、二つの牡丹をかたどった提灯に出くわしたために喬生は命を落とし、明州の人々も重病に苦しんだことになる。だからこそ鉄冠道人は裁きのなかで、〝焼壊双明之灯（双明の灯を焼毀せよ）〟という沙汰をも下したのではないか。

とはいえ、否定的な意味ばかりを担っているのでもあるまい。瞿佑の『香台集』については、岡崎由美「瞿佑の『香台集』について―『剪灯新話』成立の一側面―」（『中国文学研究』第九期、一九八三年）に詳しい。『香台集』は七言絶句百二十首を収め、いずれも歴史上あるいは虚構の世界で有名な女性をめぐって描かれている。各首について詩題、本事、作品、補注という構成をとり、岡崎氏の考証によれば補注は明の徐伯齢による。その『香台集』巻上の十六首目に、双頭の牡丹を扱った詩「上官應制」がみえる（抄本マイクロフィルム、偉文図書出版社排印本。抄本は官を郎とする）。

曾讀昭儀應制詩，嗅蘭連壁比雙枝。【壁、当作壁】
牡丹自是為唐瑞，多卻傍觀武三思。
（上官昭儀の応制詩をよむと、かぐわしい蘭や一対の玉に双頭の牡丹をたとえていた。
この花は唐王朝にとって瑞兆のはずなのに、武三思のふるまいを傍観することが多かった。）

昭儀は女官の最高位。唐高宗のとき上官婉児が「宴賞双頭牡丹」詩を詠んだことは、柳宗元の撰と称する『龍城録』の「高皇帝宴賞牡丹」などに見え、その詩には〝勢如連壁友，情若嗅蘭人（勢は連壁の友のごとく、情は嗅蘭の人のごとし）〟とあった。安定団結の吉兆として寿いだのである。上官婉児については西村富美子「詩人上官昭容論―その伝記―」（『入矢教授小川教授退休記念中国文学語学論集』入矢教授小川教授退休記念会、一九七四年）に詳しい。彼女は才能を武則天に認められ、また中宗の韋皇后や武則天の甥の武三

思とも親しい重要人物だったが、のちに玄宗の挙兵で殺された。

瞿佑が『香台集』で描くのは、二重の歴史の皮肉であろう。双頭の牡丹は縁起物のはずが、唐朝の命運はかえって危機に瀕した。また高宗にたいして唐朝の将来を祝した上官婉児が、そのためになし得たのは実力の発揮ではなく生贄となることであった。おそらく牡丹は上官婉児の比喩でもあり、名指しを避けることで瞿佑は、彼女への惻隠の情をも示しているように思う。〝傍観〟という表現にしても、上官婉児が陰謀に消極的であったと言いたげである。本事のところでも『後村詩話』を引くかたちで、孟子（尽心下）の言葉をふまえて次のように述べている。

亦可謂才女子矣、惜其行有不掩矣。

（やはり才能ある女性と言えようが、残念ながらその行動には言葉通りでないところがある。）

上官婉児の言行不一致を指摘しつつも非業の死を悼む気持ちが、双頭の牡丹には込められていると言えよう。

上官婉児に対する評価が二面性を帯びることは、瞿佑が「牡丹灯記」で双頭の牡丹にこめた意味合いにも関わってくるはずである。双頭は一対という幸福と、異形という不吉との、それこそ双方の意味を象徴していた。そもそも牡丹のイメージからして、けして一面的なものではあるまい。前述の李樹桐氏や斉藤茂氏などの研究によれば、牡丹という言葉は謝霊運の詩にも見えるが、普遍化する契機は武則天が故郷から長安や洛陽に移植させたことである。それが下賜によって移植を重ね、次第に普及してゆくとともに、高貴あるいは妖艶な女性のイメージを帯びてゆく。それに大きな影響をあたえたのは李白の「清平調」三首であり、これは周知のように楊貴妃を描いている。つまり武則天に楊貴妃、ここに上官婉児も加えて、みな褒貶半ばする存在であるが、牡丹はそんな彼女たちの縁語でもあった。とくに上官婉児や楊貴妃は天寿を全うしておらず、その点でも符麗卿と一脈通ずる。

二　瞿佑の苦心

『剪灯新話』全二十一話は、殆どが何らかのかたちで俗世と異界との関わりを描く。その原因として、瞿佑には怪力乱神への興味も強かったであろうが、のみならず戦乱や社会的不公正といった当時の現実への怒りがあり、苛酷な現実に翻弄される人々への同情をこめて、『剪灯新話』を記したように思われる。モチーフは唐宋伝奇の焼き直しのようでも、それを借りつつ南宋から明初にかけての事実を反映したとみられる作品が多い。作品世界において亡くなった人々が姿を現すのは、この世の人々に何かを伝えたり、現世で宿願を果たそうとしてであるが、それは現実世界において生者が忖度する、死者たちの無念さを文学化したものと考えられよう。

念のために確認しておくと、『剪灯新話』は、膨大な『剪灯録』の一部分がたまたま残ったというような性質のものではない。瞿佑はかつて『剪灯録』四十巻に〝古今怪奇之事を編輯〟したのち、洪武十一年戊午（一三七八）に〝遠きも百年を出でず、近きは止だ数載に在〟る〝近時〟を、『剪灯新話』にまとめたのである。その後の人生の暗転で瞿佑は膨大な著述を失ったが、『剪灯新話』については永楽十九年辛丑（一四二一）に校正の機会を得ている（瞿佑「剪灯新話序」、「重校剪灯新話後序」（『古本小説叢刊』影印朝鮮刊本、岩波書店『新日本古典文学大系』七十五影印慶安刊本））。要するに『剪灯新話』は、『剪灯録』とは別のものである。これは陳国

軍『明代志怪伝奇小説研究』（天津古籍出版社、二〇〇六年）や喬光輝『明代剪灯系列小説研究』（中国社会科学出版社、二〇〇六年）など最近の研究が明快に説くとおりである。

『剪灯新話』には「牡丹灯記」のほかにも、幽鬼が登場する情愛の話がいくつかある。たとえば「金鳳釵記」（巻一）で呉興娘は、十九歳で病死したのち、妹の呉慶娘の体を借りていいなずけの崔興哥と駆け落ちした。二人で一年暮らしてから、妹に体を返して冥界に去る。元の大徳年間（一二九七～一三〇七）のことであった。

また「滕穆醉遊聚景園記」（巻二）の衛芳華は、南宋の理宗の宮女をつとめ二十三歳で死ぬが、元の延祐年間（一三一四～一三二〇）になって滕穆のもとに現れる。滕穆も彼女を幽鬼と承知のうえで夫婦としてすごすが、三年後に衛芳華は姿を消す。

「愛卿伝」（巻三）では、羅愛愛という妓女が趙六という御曹司と結婚するが、至正十六年（一三五六）に張士誠が蘇州を制圧した影響で戦乱に巻き込まれ、劉万戸から迫られて自害する。のちに趙六のもとに姿を現し、宋家の男児に転生するから訪ねてほしいと頼み、その夜は夫婦として過ごす。

「翠翠伝」（巻三）の劉翠翠は、金定と結婚して一年足らずで張士誠の挙兵による戦乱にまきこまれ、李将軍につかまる。十七歳であった。七年後に金定と再会するが、兄妹としてしか会えないことに絶望し、相次いで病死する。洪武年間の初めになって、かつての召使に手紙を託して父母に無事を知らせるが、喜んだ父が訪ねた先は二人の墓であった。二人は父の夢枕に現れ、先立つ不孝をわびたかったのである。

最後に「緑衣人伝」（巻四）では、賈似道の侍女が、元の延祐年間（一三一四～一三二〇）になって趙源の前に現れる。彼の前世は彼女の同僚で、互いに憎からず思っていたことが発覚し、二人とも賈似道に殺されたという。それから三年間を夫婦として過ごしたのち、彼女は姿を消す。

こうしてみると情愛がらみの幽鬼の話で、現世の人間に対するトラブルが起こるのは「牡丹灯記」だけという印象を受ける。喬生は幽鬼と交際のすえに死に、そののち明州の人々は彼らの姿を見て病気になったからである。では幽鬼の情愛に同情的な『剪灯新話』に、なぜ瞿佑は「牡丹灯記」のような話を載せたのであろうか。

瞿佑は「剪灯新話序」でつぎのように述べている。

既成，又自以為渉於語怪，近於誨淫……雖於世教民彝，莫之或補，而勧善懲悪，哀窮悼屈，其亦庶乎言者無罪，聞者足以戒之一義云爾。

（『剪灯新話』ができてみると、怪を語ったり、淫を教えんばかりの内容だと思えた……世の人々の常識や道理には、何の足しにもならないが、勧善懲悪や、行き詰まった人々の死を悼むという点で、採るべきものもまた含まれている、という程度のものであろう。）

これは恐らく建前に過ぎないであろう。〝怪を語るに渉り、淫を誨うるに近し〟とは、予想される批判の先回りをした表現で、瞿佑自身は幽鬼が怪だとか、情愛が淫だなどとは思っていない。だからこそ、ここでも〝窮屈を哀悼〟すると言っている。そうでなければ、初めから『剪灯新話』など書きはしまい。とはいえ、それを世に出す以上、このような建前からの批判に対応できる作品も必要となる。そのような配慮のもとに用意されたのが、「牡丹灯記」ではないだろうか。おそらく堀田文雄氏いうところの〝自己の立場を遮蔽する外皮〟は、ここにもあてはまる（「『剪灯新話考』――文脈の二層性に

ついて―」（『集刊東洋学』第三十九号、一九八〇年）参照）。

とはいえ「牡丹灯記」においても、瞿佑は符麗卿への同情を忘れていない。だからこそ前述の太刀川清氏も指摘することだが、じつは金蓮こそが最大の批判対象なのであろう。金蓮は、双頭牡丹の提灯をもって符麗卿を先導する侍女として登場する。だがその正体は、喬生が湖心寺で目撃したように盟器婢子、つまり副葬品の人形の侍女であった。符麗卿のような幽鬼ではなくて、金蓮は器物の怪だったのである。そして鉄冠道人にたいする供述も、符麗卿や喬生と違って改悛の情が見られない。太刀川氏はこの背景に、淫祠妖廟信仰や土偶妖異の物語をみとめ、さらには「牡丹灯記」の原形のひとつとして「張氏子」（『太平広記』巻三百六十六「妖怪」八）を挙げる。これは張という男が盟器婢子に魅入られ、道士に救われる話である。ただし牡丹は出てこない。なお盟器にかかわる話は、澤田瑞穂「土偶妖異記」（『鬼趣談義』中公文庫、一九九八年）に詳しいほか、『太平広記』巻三百七十二（「精怪」五「凶器」下）にも五つほど見える。

『剪灯新話』には「永州野廟記」や「申陽洞記」のようにヘビやサルの精が出てくる話もあり、それらは権力者の戯画ともみられるが、やはり現世の人間に害をなしている。「牡丹灯記」で幽鬼たる符麗卿と喬生の情愛を批判しているように見えても、そこには俗論を慮った瞿佑の韜晦があり、少なくともある程度は同情的だと言えよう。してみれば「牡丹灯記」という作品自体が、表裏二重の意味合いをもっていることになる。

たしかに符麗卿には同情すべき点もある。たとえば喬生が死ぬ前に、符麗卿は彼につぎのように訴えた。

妾與君素非相識，偶與燈下一見，感君之意，遂以全體事君，暮往朝來，於君不薄。奈何信妖道士之言，遽生疑惑，便欲永絶。薄倖如是，妾恨君深矣。今幸得見，豈能相舍。

（わたしはあなたとは見ず知らず、お祭の日に偶然出会って、あなたが好いてくれたから、わたしはすべてを捧げて、それからずっと、あなたに尽くしました。それなのに妙な道士の言うことをきいて、急にわたしを疑いだして、そのまま会ってくれなくなった。何とつれない人かと、本当にお恨みしました。やっと会えたのだから、もう離しません。）

かりに喬生が周囲の声にかかわらず符麗卿と付き合い続けても、同じ結果になったのであろうか。あらためて『剪灯新話』における女性幽鬼たちの情愛を想起すれば、そうとも限るまい。とくに「滕穆酔遊聚景園記」における滕穆と衛芳華の場合、やはり二人は見ず知らずであった。だが滕穆は相手を幽鬼と知りながら恐れず、衛芳華もそれに応えて三年のあいだ尽くしてから身を引いたのである。ひるがえって「牡丹灯記」で二人の逢瀬はわずか半月ほどで、あまりに短い。符麗卿からすれば随分な仕打ちであろう。しかも〝妖道士之言を信じ〟て会えなくなってから符麗卿のこの言葉までひと月以上がたっている。話の結末で鉄冠道人が〝妖道士〟魏法師の口をきけなくしたのは、符麗卿の言い分を暗に認めたものではないか。

喬生の遺体が見つかったとき、寺の僧侶もこう言っていた。

此奉化州判符君之女也，死時年十七。權厝於此，舉家赴北，竟絶音耗，至今十二年矣。不意作怪如是。

（こちらは奉化の州判だった符様のご令嬢で、亡くなったとき十七歳でした。ここにご遺体を預け、ご家族は北方へ行かれ、音沙汰も無く、もう十二年。こんな事をしでかすとは。）

逆に言えば、それまで符麗卿は男性を情交のすえに死なせたことは

無く、だからこそ〝意わず、怪の是の如きを作すとは〟というのであろう。このあと彼女たちの姿を見た明州の人々が病気にかかるようになったのも、符麗卿の側からすれば、周囲の無理解に我慢ならなくなったからであろう。家族と離れて十二年も放置され、ようやく出来た恋人も奪われかけたのである。かくて幸福への願いをこめた双頭の牡丹は、不吉なものへと意味合いを変えた。どちらも符麗卿の情念がなせるわざである。

ともあれ事ここに至っては、符麗卿も断罪されねばならない。現世の人間に被害が及んでは困る。たしかに情状酌量の余地はある。仮もがりのまま十二年もすぎた点にしても、彼女自身の罪ではあるまい。この話は至正庚子（一三六〇）に起こったとされるから、家族が彼女を放置して北方に去ったまま音沙汰がないのも、元末の戦乱を反映するだろう。しかし瞿佑は、さらに『剪灯新話』全体のバランスも考慮しなければならない。

そこで、分かる人には本音が分かり、分からない人には表面的に理解されるように瞿佑は「牡丹灯記」を描いたのではないか。そして、この作品を読み解く鍵としたのが、符麗卿の情念の象徴であり前述の複数の含意をも秘める牡丹の花だったのではないだろうか。単に「牡丹灯記」とあり双頭が目立たない点も、あるいは偶然ではないかもしれない。

三　『牡丹亭還魂記』の藍本について

以下しばらく湯顕祖の『牡丹亭還魂記』をめぐって、岩城秀夫『中国戯曲演劇研究』（創文社、一九七三年）や根ヶ山徹『明清戯曲演劇史論序説』（創文社、二〇〇一年）をはじめ諸先達の研究成果をふまえつつ、牡丹の問題を中心にして述べたい。

『牡丹亭還魂記』の藍本は、晁瑮『宝文堂書目』巻中の「子雑」にみえる「杜麗娘記」であろう。それに相当する現存テキストとしては、「杜麗娘記」と「杜麗娘慕色還魂」の二つが知られている。前者は文言調で書かれており、馮猶龍の増編、余公仁の批補と称する通俗類書『燕居筆記』の巻之八にみえ、本文タイトルは「杜麗娘記」だが目録では「杜麗娘牡丹亭還魂記」となっている。後者は相対的に白話調であり、何大掄の「引」を巻頭にもち李澄源の新〔梓〕と称する『燕居筆記』の巻之九（下層）にみえる。両者の内容は、筋書きとしては大きな違いが無い。この『燕居筆記』二種は、孫楷第『日本東京所見中国小説書目』によれば前者が清初の、後者は明季の刊本と見られる。そこで先行する後者「杜麗娘慕色還魂」を藍本と見なして湯顕祖『牡丹亭還魂記』と比較研究することが、広く行なわれてきた。

ところが最近、向志柱「《牡丹亭》藍本問題考弁」（『文芸研究』二〇〇七年第三期。のち『胡文煥《胡氏粋編》研究』中華書局、二〇〇八年）は多くの論拠を挙げて、「杜麗娘記」こそが藍本であることを指摘した。筆者なりに敷衍すると、まず文言調の「杜麗娘記」は胡文煥の彙選になる『稗家粋編』（『胡氏粋編』所収、『北京図書館古籍珍本叢刊』第八十巻影印本）巻二にも収められており、従来のテキストとの異同は少ない。この『稗家粋編』は万暦二十二年（一五九四）の序を持つから、『燕居筆記』二種はもとより湯顕祖『牡丹亭還魂記』の「作者題詞」にみえる万暦戊戌（一五九八）よりも早い。つぎに「杜麗娘記」と白話調の「杜麗娘慕情還魂」とを対校してゆくと、後者は前者に加筆修整したもので、しかし杜撰なところがある。たとえば杜麗娘は初め十六歳のはずが、二十一歳

になったり十八歳に減ったりしている。また彼女が契りの夢から、母親が来て目覚めたあとの様子は、文言調の前者では次のようになっている（便宜上、スラッシュを入れて改行した）。

甄氏曰：〝後花園中冷靜，可同回至中堂。〟

／麗〔娘〕雖身行，心内思想夢中之事，未嘗放懷，行坐間如有所失。

（甄氏が言います。〝裏の花園はさびしいところですからね。一緒におもての部屋に戻りましょう。〟

／杜麗娘は母について行きましたが、心のなかは夢での出来事を思い、すっきりできず、何をしていてもぼんやりします。）

これが白話調の後者では次のようになっている。

夫人曰：〝孩兒，這後花園中冷靜，少去閑行。〟小姐曰：〝領母親嚴命。〟道罷，夫人與小姐同回至中堂。

／飯罷，這小姐口中雖如此答應，心内思想夢中之事，未嘗放懷，行坐不寧，自覺如有所失。飲食少思，淚眼汪汪，至晚不食而睡。

（夫人が言います。〝その裏の花園はさびしいところですから、行ってはいけません。〟〝お母様のお言いつけに従います。〟令嬢がそう言うと、夫人は令嬢と一緒におもての部屋へ戻ります。

／食事のあと、この令嬢は口ではそう返事をしたものの、心のなかは夢での出来事を思い、すっきりできず、何をしていても落ちつかず、自分でもぼんやりしていると感じます。のども渇かずおなかも減らず、涙ばかりがあふれて、夜まで何も食べずそのまま寝ました。）

後者は食事を済ませている以上（〝飯罷〟）、そのあとようやく返事をする（〝口中雖如此答應〟）のは順序がおかしいし、〝飲食少思……至晚不食而睡〟云々もまた蛇足である。このようにして、「杜麗娘暮色還魂」に杜撰な加筆修正が行なわれているとすれば、二人のセリフが『牡丹亭還魂記』第十齣「驚夢」と同じ点にしても、従来は湯顕祖が芝居に流用したものと解釈されてきたが、逆の理解が可能になってくる。

『燕居筆記』は版本が三つ知られるが、そのうち最古と目される林近陽増補、余泗泉梓行の『燕居筆記』に「杜麗娘慕情還魂」は収録されていない。この現存最古の『燕居筆記』が刊行されたのは万暦三十一年（一六〇三）前後と考えられるから（萃慶堂余泗泉はこの年に鄧志謨の『鉄樹記』などを刊行している）、その段階で「杜麗娘慕情還魂」はまだ存在しなかった、つまり湯顕祖の『牡丹亭還魂記』（一五九八年）よりのちに書かれた可能性が高い。なお文言調の「杜麗娘記」だが、馮猶龍の増編、余公仁の批補と称する『燕居筆記』の目録で「杜麗娘牡丹亭還魂記」となっているのも、やはり『牡丹亭還魂記』より後出だからであろう。

さて成立時期を考えるに、「杜麗娘記」の冒頭には次のようにある。

宋光宗間，廣東南雄府尹姓杜，名寶，字光輝。生女為麗娘，年十六歳。

（宋の光宗のとき〔一一九〇～一一九四〕、広東の南雄府の知事は杜宝、あざなは光輝という人でした。麗娘という娘がいて、年は十六歳でした。）

南雄が府となったのは、実際には明代のことであるから、この作品は宋元には遡らないであろう。そこで成立の下限であるが、柳夢梅が科挙に臨むべく旅立つ場面で、すでに生き返っている杜麗娘は送別の詞を詠む。

方（解）〔綰〕同心結，又為功名別……安得此魂，隨去處處伴

郎歇。
（やっと夫婦になれたのに、あなたは飛躍のために旅立つ……わたしの魂だけでもいつも一緒について行ければいいのに。）
柳夢梅もこれに唱和している。
唱且隨，心甚悅，秋闈阻隔心益裂……長歎一回一哽咽。
（歌を交わせば、心は躍るが、受験で会えないと思えば心は乱れてゆく……ため息をつきむせび泣く。）
これらの詞は、明の中篇伝奇小説『天縁奇遇』で祁羽秋が科挙に臨むとき、廉麗貞と交わした詞に似ている。送別の詞は「陽関引」、唱和の詞は「長相思」とされるが、「杜麗娘記」では「陽関引」の前闋末尾が二句足らず、（『詞律』巻十一、『曲譜』巻十八参照）、これは『天縁奇遇』を利用した際のミスであると見られる。『天縁奇遇』は嘉靖後期ごろの作品と目されるが、「杜麗娘記」が『宝文堂書目』に記録されている以上、こちらの成立も同じころと考えられる。

ここまで向志柱氏の考証を敷衍してきたが、大筋において妥当であろう。そこで「杜麗娘記」を『牡丹亭還魂記』の藍本として以下、考察をつづける。

四　梅と柳と鬼交

さて藍本たる「杜麗娘記」において、杜麗娘がみた夢での契りは以下のように描かれる。
只見一生向前，將麗〔娘〕摟抱去牡丹亭畔、芍藥架邊，共成雲雨之歡娛，兩情和美。忽值母甄氏至房中喚醒，一身冷汗，乃是南柯一夢。
（若者は進み出て、杜麗娘を抱きしめると、牡丹のあずまやや芍薬の花壇のあたりへと連れてゆき、幸せに契りを結び、心は一つとなりました。急に母親の甄氏が部屋に起こしに来たので、真っ青になりましたが、じつは夢を見ていたのでした。）
じつは牡丹亭も牡丹も、ここで一度だけ出てくるに過ぎず、戯曲のように度々言及されるわけではない。それは必ずしも千五百字ほどの短い作品だからではなく、そもそも藍本では牡丹亭や牡丹がさほど重要な役割を果たしていないためであると考えられる。念のために言えば、これは白話調の「杜麗娘慕情還魂」でも同様である。
あらためて「杜麗娘記」のあらすじを確認しよう。大きく三つの部分からなる。
杜府尹の令嬢である杜麗娘は、夢のなかで柳の枝を持った男性と契りを交わし、それが忘れられずに衰弱死する。彼女は自画像に自作の詩を添えて屋敷に残し、生前の遺言どおり梅の樹の下に葬られた。
後任の柳府尹の子息である柳夢梅は、杜麗娘の題画をみつけて唱和し、すっかり魅せられる。その夜から杜麗娘が訪ねてくるようになり二人は逢瀬を重ねる。やがて事情を知った柳夢梅は両親に告白し、棺を開くと杜麗娘は生き返った。そこで柳府尹は二人の祝言を上げ、杜府尹にも知らせる。
杜府尹夫妻は知らせを得て喜ぶ。柳夢梅は科挙に合格し、やがて両家は顔をあわせる。のちに杜麗娘は二子を生み育て、柳夢梅ともども幸せに一生を終えた。
この「杜麗娘記」において重要なのは、梅の樹である。それは杜麗娘にとって死と再生の場所である。彼女は夢の契りを追憶するなかで梅の樹に魅せられ、その下に葬られることを望んだ。

至次早，獨步後花園中，閑看夢中所遇書生之處。冷靜寂寥，杳無人跡。忽見一株大梅，梅子磊落可愛，其樹矮如傘蓋。麗〔娘〕至樹下甚喜而言曰：〝我若死後，得葬於此，幸矣。〟

（つぎの朝、ひとりで裏の花園を歩きながら、夢で書生とあった場所を見ていました。何ともうらさびしく、まったく人の気配がありません。大きな梅の樹がありました。梅の実がたくさん成っていて、枝は地を覆わんばかりに大きく広がっています。杜麗娘は樹の下まで来てすっかり気に入って言いました。〝私がもし死んだら、ここに葬ってもらえれば、幸せだわ。〟

ここに描かれた梅の樹の姿は、子沢山で安定した家庭を象徴し、そこに杜麗娘は将来への望みを託したようにも見える。また樹木が死と再生の場所というのも、神話的構造を見出しやすい。ただそれにしても、なぜ梅なのか。

念のために『牡丹亭還魂記』の「作者題詞」で、湯顕祖が作品の素材について述べた部分を見ておこう（人民文学出版社排印本）。

傳杜太守事者，彷彿晉武都守李仲文、廣州守馮孝將兒女事。予稍為更而演之。至於杜守收拷柳生，亦如漢睢陽王收拷談生也。

（杜太守の事件を伝える話は、晋の武都太守の李仲文や広州太守の馮孝将の子供たちの話のようだ。わたしは杜太守の話に少し手を加えた。杜太守が柳生をつかまえ拷問するくだりは、漢の睢陽王が談生をつかまえ拷問する話にも似ている。）

大意はすでに指摘されるように、「杜麗娘記」は他にも似た話がある内容で、自分はこれに手を加えて『牡丹亭還魂記』を作ったが、杜太守が柳夢梅を捕らえて取り調べる部分は談生の話に近くなった、ということであろう。湯顕祖が言及する三つの話は、それぞれ『太平広記』でいえば巻三百一十九「張子長」、巻二百七十六「馮孝将」、巻三百一十六「談生」に当たる。いずれも令嬢の幽鬼が男のもとに現れるモチーフだが、梅も牡丹も出てこない。

梅にちなんだ有名な話のひとつに、柳宗元の撰と称する『龍城録』の「趙師雄醉憩梅花下」がある。隋の趙師雄が酔って出会った女性は、酔いが醒めれば姿を消していたが、それは大きな梅樹の下での出来事だったという。この話では、彼女は梅の樹の精であったと思われる。さてそこで注目されるのは、つぎに要約する、南宋の周密『斉東野語』巻十八「宜興梅塚」に記された話である（中華書局『唐宋史料筆記叢刊』本による）。

嘉熙年間（一二三七～一二四〇）に近属で宜興県宰を務める者がいた。紅梅の下でみなで酒を飲み、散歩していると紅裳の女子を見かけ、それから躁鬱状態になった。事情通の老卒がいうには、ある知県の娘が笄におよび未婚で亡くなり、葬って梅を植えて目印にしたという。そこで棺を開いてみると亡骸は生けるが如く、そして美しい。〝趙、見て之が為に惘然と心酔し〟夜な夜な交わり、やせ衰えた。家族が隙を見て亡骸を焼き捨てたが、彼は結局亡くなった云々。

この「宜興梅塚」の話は、「趙師雄醉憩梅花下」に比べれば「杜麗娘記」に近い。しかも男の名は基本的に伏せられているが、一箇所だけなぜか〝趙〟と書いてある。『龍城録』の趙師雄の話が、周密には何らかのかたちで意識されていたことを示すと言えよう。

ここで想起したいのは、岩城秀夫「梅花と返魂―蘇軾における再起の悲願―」（『日本中国学会報』第三十集、一九七八年）が指摘するように、〝梅花と返魂を結びつける考え方が、唐代から存在した〟点である。「宜興梅塚」の亡骸がもし再生すれば、かなり「杜麗娘記」に近づく。つまり「杜麗娘記」は、こうした梅の樹の逸話や霊

力にまつわる観念に影響を受けており、だから杜麗娘が遺言して梅の樹の下に葬られる設定なのではないか。

梅のもつ影響力が、「杜麗娘記」において牡丹よりはるかに大きいことは、令嬢と交わる男性が〝夢梅〟と名付けられている点からも窺える。母親が梅を食べる夢を見て懐妊したから〝夢梅〟だ、と「杜麗娘慕色還魂」がいうのは恐らく蛇足の一つで、本来は彼が杜麗娘に魅せられてしまう筋書きを踏まえて、こう名づけられたのであろう。

夢梅の姓は柳とされるが、あらかじめ留意したいのは、はじめ杜麗娘の夢に出て来る男性が柳夢梅であるとは断定できない点である。『牡丹亭還魂記』の場合は第二齣「言懐」で、柳夢梅が梅の樹の下に立つ女性の夢を見るとされるが、「杜麗娘記」にはそのような伏線も、ほかの説明も無いのである。この夢のなかの男性が〝折楊柳一枝〟を手にもつのは、しばしの別れを暗示しているふしもあるが、ともあれその男性から柳の詩を頼まれた杜麗娘は、のちに自画像につぎの詩を付してようやく応えた格好である。

近睹分明是儼然，遠観自在若飛仙。
他年得伴蟾宮客，不在梅邊在柳邊。
（近くで見れば生きているよう、遠くから見れば仙人のよう。
いつか進士のそばにいられるなら、梅ではなく柳のそばに。）

ここで柳と梅が結び付けられた。すると柳という姓は、春を象徴する植物として梅との縁から選ばれたか、それとも前述のように柳が別離の象徴なら、媒に通じる梅は再会を暗示するという関係であろうか。ほかに『龍城録』の撰者とされる柳宗元から連想した可能性もなくはない。

いずれにせよ夢梅の姓が柳なのは、話の順序としては夢のなかの男性が柳の枝を持っていたことに連動するが、本来この夢のなかの男性は、柳という樹木の精ではあるまいか。それなら杜麗娘が梅の樹の精にさかのぼりうる点とも釣り合いがよい。このことを考えるためにまず、前述の「宜興梅塚」を想起しよう。そこでは男性が紅梅の下で幽鬼に魅せられて死ぬ。虚心に「杜麗娘記」を読めば、柳夢梅が杜麗娘の残した題画をみて彼女に恋するのも、それに類していないだろうか。前述のように「杜麗娘記」では両者の関係について、『牡丹亭還魂記』とちがい伏線もなにも無いのである。「杜麗娘記」の設定は、『牡丹亭還魂記』第十四齣「写真」も言及する真真こと南岳地仙と趙顔の話（「画工」、『太平広記』巻二百八十六）あたりがヒントと見られ、前述の澤田瑞穂「土偶妖異記」にもいくつか類話が紹介されている。要するに、柳夢梅が幽鬼に魅入られた側面のあることは否定できない。

女性のほうに目を移すと、じつは先ほど湯顕祖が言及していた類話三つのうち、「馮孝将」（『太平広記』巻二百七十六）のなかで、徐玄方の娘は自分の死因について〝為鬼所枉殺（幽鬼のためにむざむざ命を落としました）〟と語っている。ほかの「張子長」や「談生」は女性の死因に触れず、「宜興梅塚」も同様だが、必ずしも紙幅の制約ではなく、言うを憚るという配慮があるのではないか。

隋の巣元方『諸病源候総論』巻四十（『四庫全書』本）「夢与鬼交通候」は次のように述べる。

夫臟虚者喜夢，婦人夢於鬼交，亦由腑臟氣弱，神守虚衰，故乗虚因夢與鬼交通也。
（そもそも臟腑が弱ると夢を見がちである。婦人が夢で〝鬼〟と交わるのも、やはり臟腑の気が弱り、集中力が続かないからである。だから臟腑が弱ると夢をみて〝鬼〟と交わってしまう

のだ。）

ここでの〝鬼〟は、次の例でみるように幽鬼に限定されない。その〝鬼〟との交合が、内臓の不調に起因すると巣元方は述べているが、唐の張鼎『玉房秘訣』（丹波康頼『医心方』巻二十八「断鬼交」第廿五、人民衛生出版社影印本）では、また別の説明がなされる。

采女云：〝何以有鬼交之病？〟彭祖曰：〝由於陰陽不交，情欲深重，即鬼魅假像，與之交通……。〟

（采女が問う。〝なぜ〝鬼〟と交わる病気にかかるのですか。〟彭祖が答える。〝陰陽の気が偏り、情欲が発散されないままだと、鬼魅が姿を現し、それと交わってしまう……。〟）

つまり幽鬼や妖怪との交合すなわち〝鬼交〟は、満たされない情欲が原因だというのである。

杜麗娘が夢に見た男性は樹木の精かもしれないと、先ほど述べた所以はここにある。「杜麗娘記」を虚心に読めば、杜麗娘もまた、〝鬼交〟の病にかかった患者の一人と見なしうるのではないか。その意味では、何本『燕居筆記』が「杜麗娘慕色還魂」と題するのも頷けよう。

加えて柳夢梅のほうは絵に魅かれて杜麗娘の霊と交わるに至るのだから、どうやら「杜麗娘記」は、〝鬼交〟の話を二つ重ねる趣向の作品であると見受けられる。だから再生後の二人の前には大した障碍も無いように描くのであろう。

ところが湯顕祖は『牡丹亭還魂記』でそれを描きなおした。柳夢梅と杜麗娘は運命の恋人同士であり、以前から夢で情愛を通わせ合っており、それを貫いて現実の障碍に立ち向かうのである。第二齣の段階であらかじめ、柳夢梅が杜麗娘らしき女性の夢をみていたのは、したがって重大な変更である。また「杜麗娘記」とちがって、杜麗娘の復活後に後半さまざまな曲折があるのも、二人の関係はしょせん〝鬼交〟であるという批判への反論を、登場人物たちの言行を借りて行なっているふしがある。

たとえば第三十四齣「訶薬」で、回生の妙薬を買い求めに来た石道姑に、陳最良が渡すのは〝焼襠散〟つまり男性下着を焼いたものであり、女性の〝奇怪之病〟に効くという（男性の〝奇怪之疾〟には〝寡婦床頭土〟）。この齣は陳最良のいい加減さをコミカルに描くようだが、一面ではこのあたりの消息をも暗示するであろう。なお明の李時珍『本草綱目』は、たとえば安息香の「主治」の一つとして〝婦人夜夢鬼交〟を挙げ（巻三十四）、鹿の角の項でも同様に〝又治婦人夢与鬼交者〟などと述べている（巻五十一。中国書店影商務印書館鉛印本）。

湯顕祖は〝鬼交〟を描いた奇事逸聞を、情愛の賛歌へと生まれ変わらせたのである。そうすると牡丹の強調も、『牡丹亭還魂記』が藍本「杜麗娘記」とは違った話であること、に関わるのではないだろうか。

五　牡丹と幽鬼

清の梁廷枏『曲話』巻二は、『牡丹亭還魂記』第十齣「驚夢」にうたわれる「山桃紅」について、喬夢符『李太白匹配金銭記』雑劇第三折のうち韓翃が王府尹のむすめ柳眉児と夢のなかで会ったことを回想する部分に〝我見他恰行這牡丹亭（ちょうど彼女がこの牡丹亭に行くのをみた）〟云々とあるのを踏まえていると指摘する（『中国古典戯曲論著集成』八）。これは、なぜ牡丹亭なのかという問いに対する一つの解釈とも言えよう。ただ『金銭記』の当該部分は、

たんに韓翃が柳眉児に恋焦がれることを示すひとつの挿話に過ぎない。

また清の焦循『劇説』巻二は、『牡丹亭還魂記』が『碧桃花』や『倩女離婚』に基づくと述べているが（『中国古典戯曲論著集成』八）、このうち無名氏『薩真人夜断碧桃花』雑劇楔子で、張道南がいいなずけの徐碧桃と偶然であうのも、牡丹の花園である。徐碧桃は父に密会を疑われて自殺し、その幽鬼が張道南と契りをむすび、のちに急死した妹の体に薩守堅のちからで転生する。この雑劇については後にも触れるが、ただこれをもって『牡丹亭還魂記』で牡丹が強調されるに至ったとまでは言えないであろう。このような借屍還魂の内容であっても、牡丹と無関係の話は珍しくない（たとえば『剪灯新話』の「金鳳釵記」）。

そもそも牡丹の花咲くなか男女が出会う場面なら、そんなに珍しくもあるまい。また牡丹に言及した湯顕祖の詩文も「再覲回宿龍沢駅」をはじめ幾つかあるが（『湯顕祖集』、上海人民出版社排印本）、積極的な手がかりは見出しにくい。

むしろ筆者が留意したいのは、牡丹と幽鬼をむすびつけた俗諺が、おそらく元のころには存在したことである。たとえば珠廉秀「酔西施・玉芙蓉」には〝便是牡丹花下死，做鬼也風流（たとえ牡丹の花咲く場所で死んで、幽鬼になったとしてもそれはそれで風流）〟とあり（『全元散曲』所引『詞林白雪』二）、曾瑞卿『王月英元夜留鞋記』第二折には〝拼向牡丹花下死，做鬼也風流〟、李好古『沙門島張生煮海』第三折には〝牡丹花下鬼風流〟とある（いずれも『元曲選』）。明の丘濬『鍾情麗集』には〝甘向牡丹花下死，便為情鬼也風流〟とあり（『国色天香』）、以降も用例には事欠かない。なお孫仲章『河南府張鼎勘頭巾』第三折のように〝碧桃花下死，做鬼也風流〟と牡丹が碧桃になっているものもあるが、他に用例を知らない。後述のように碧桃のほうは変種にすぎないであろう。

この俗諺は、おそらく本来は後半に力点がある。つまり死んでもかまわないと言いたくて、それを強調するために牡丹を持ち出すのである。ではなぜ牡丹かといえば、それは一種のアンチテーゼなのであろう。前述のように唐以来、牡丹の花は高い人気を得ており、これに情熱を傾ける風潮に対しては〝一城の人みな狂うがごとし〟（白居易「牡丹芳」）などと批判があった。

しかし言葉は独り歩きする。たとえば先ほど、〝碧桃の花のもとで死ぬのも風流〟という言葉は変種であろうと述べたが、そのような変種が生まれるのは、前述の『碧桃花』雑劇との関係が考えられる。そこでは徐碧桃が葬られた場所に碧桃の花が咲き、それを頼りに幽鬼が姿を現す。つまり俗諺中の花や幽鬼といった言葉が具体的な話と結びついた結果、牡丹が碧桃に置き換わったのであろう。とはいえ所詮、本家の牡丹にはかなわない。

では牡丹の花と幽鬼にかかわる具体的な話は何だろうか。それはやはり、『剪灯新話』の「牡丹灯記」ではないだろうか。

湯顕祖には当然「牡丹灯記」を読む機会があったはずである。前述のように一五九四年の序をもつ『稗家粋編』には「杜麗娘記」が収められているが、この叢書には『剪灯新話』からも八編が採用されており、「牡丹灯記」も含まれている（巻六）。また、その前年の虞淳熙「剪灯叢話題辞」をもつ『剪灯叢話』（高知県立図書館蔵。秋吉久紀夫「再び剪灯叢話について―万暦期文芸思想動向の一斑―」（福岡女子大学『文芸と思想』第四十四号、一九八〇年）参照）には、『剪灯新話』のうち「華亭逢故人記」をのぞき二十話すべてが収めてあり、やはり「牡丹灯記」も入っている（巻之一）。ちな

みに虞淳熙は銭塘の人だが、湯顕祖とおなじ万暦癸未（一五八三）の進士で、二人の間には交流もあった（毛効同『湯顕祖研究資料彙編』上海古籍出版社、一九八六年）。さらに遡れば、正徳六年（一五一一）刊の『剪灯新話大全』（国家図書館（北京）蔵）も現存する。なるほど正統七年（一四四二）に禁書とされたこともある『剪灯新話』だが（『日知録之餘』巻四「禁小説」）、湯顕祖には影響しなかったと見るべきだろう。

湯顕祖にとって「牡丹灯記」をはじめ『剪灯新話』の世界は、どんな意味をもったであろうか。その手がかりは、『牡丹亭還魂記』の「作者題詞」にある。

天下女子有情，寧有如杜麗娘者乎。夢其人即病，病即彌連，至手畫形容，傳於世而後死，死三年矣，復能溟莫中求得其所夢者而生。如麗娘者，乃可謂之有情人耳。……嗟夫，人世之事，非人世所可盡。自非通人，恆以理相格耳。第云理之所必無，安知情之所必有邪？

（およそ女性に情があるなかでも、杜麗娘ほど情のある人はいない。相手を夢にみて病気になり、そのまま久しく治らず、そこでみずから自分の姿を描いて、それを残してから死に、死んで三年たってから、こんどは冥土の向こうから夢で出会った人に会おうと生き返った。杜麗娘のような人こそ、情のある人と呼べるのだ。……ああ、この世のことは、この世だけでは語れない。それに気付いていない者が、理で物事の本質に至ろうとするのだ。理で考えたらあるわけがないと言うばかりで、情で考えたら無いわけがないことに思い至らない。）

杜麗娘を引き合いに情を論じて、それに対する理のありかたを最終的には批判する。これは朱子学的思考や明代当時の現実を見据えたものであろうが、ともあれ「杜麗娘記」が湯顕祖にあたえた霊感は大きかったことが窺える。〝鬼交〟を二つ重ねる趣向の荒削りな作品であったが、かえってそれゆえに、創作意欲をかきたてられた面もあろう。ただ湯顕祖が「作者題詞」で激賞している杜麗娘は、「杜麗娘記」の彼女ではあるまい。「杜麗娘記」における情とは、煎じ詰めるなら情欲の情であった。それを湯顕祖は、もっと純粋で精神的なものへと読み替えたのである。そこで重要な役割を果たしたのは夢であった。こうして彼は「杜麗娘記」をふまえつつも、自分の解釈を『牡丹亭還魂記』に結実させたのである。

「杜麗娘記」は〝鬼交〟を二つ重ねたあと、何とも能天気にハッピーエンドへと向かう。柳夢梅の求めでただちに亡骸は掘り出され、いともたやすく杜麗娘は生き返り、周囲は何の疑問ももたずに二人を結婚させ、科挙に受かって子供に恵まれ天寿を全うする。たしかに千五百字程度の短い紙幅ではある。しかし同程度の規模をもつ『剪灯新話』の諸作品と比べたらどうであろうか。そこには杜麗娘のように何らかの原因で不幸にも世を去った女性が、情念やみがたく現世に姿を現した話が、たびたび描かれていた。それらは様々な現実を反映しつつ、情感豊かに描かれていた。彼女たちのような人々を哀悼すべく、瞿佑は『剪灯新話』を著したが、それを読んだ湯顕祖も同感であったろう。そのような話のなかに、他ならぬ「牡丹灯記」もあった。

符麗卿は、少なくとも『剪灯新話』のなかでは、もっとも杜麗娘に似たところがある。婚約者もいないうちに若くして亡くなり、家族はよその土地へ去ってしまった。しかし話の結末はといえば、ともに〝鬼交〟のヒロインでありながら、あまりにも違う。そういう点からの符麗卿への同情も、湯顕祖にはあったのではないか。むろ

ん『剪灯新話』の幽鬼たちがその情愛を肯定的に描かれるなかで、「牡丹灯記」の符麗卿が例外的だったのは、瞿佑の世間への配慮であった。そのかわりに符麗卿は、牡丹のもつ象徴性とも相俟って、上官昭容よりこのかたの女性たちの系譜にも連なることになった。そして牡丹は「牡丹灯記」によって、その多様なイメージのうちに、情念の象徴という意味合いを明確に含むに至っていた。こうしたことも湯顕祖であれば見通していたはずである。

そこで湯顕祖は、「杜麗娘記」を戯曲化するにあたって牡丹を強調することにより、瞿佑へのオマージュや、符麗卿あるいは彼女に代表される不幸な女性たちへのレクイエムとしたのではないだろうか。双頭どころかあらん限りの牡丹を咲き誇らせて。

六　小結

以上はむろん仮説であるが、それは明代の文学全体を考えるうえでも無駄にはなるまい。そこに流れる情の問題について考えるときに、初期の瞿佑と後期の湯顕祖との関わりを意識しておくことは、すなわち一本の補助線をひくことになるはずである。

湯顕祖における情の肯定に、羅汝芳や李卓吾といった当時の陽明学左派、あるいは達観など禅宗から受けた思想的影響があろうことは既に指摘されている。もっとも一般論として合山究「「情」の思想―明清文人の世界観」（『明清時代の女性と文学』汲古書院、二〇〇六年）が説くように、〝陽明学と情とを短絡的に結びつけることには問題がある〟、〝社会思潮のほうが先行していた〟と考えられる点にも留意が必要であろう。そこでは情の文化を興起させた社会的、文学的要因のひとつとして〝扇情的な淫詞小説や民歌俗曲の流行〟が挙げられている。この民歌俗曲の流行は、必ずしも明末にわかに高まったものではない。入矢義高「擬古主義の陰翳」（『明代詩文』筑摩書房、一九七八年）がつとに指摘するように、前七子の李夢陽や何景明はすでに「山坡羊」や「鎖南枝」といった〝市井艶詞〟を〝真詩〟として高く評価していた。〝情性を吟詠〟するという詩経大序の精神を民間に見出したのである（なお大木康『馮夢龍『山歌』の研究』勁草書房、二〇〇三年参照）。さらにはその先駆者として〝南方市民文学の指導者〟たる元末明初の楊維楨（吉川幸次郎『元明詩概説』岩波書店、一九六三年）を想起することも許されるであろう。この人もまた情性を重んじた（松村昂「鉄と龍―楊維楨像に関して―」（『入矢教授小川教授退休記念中国文学語学論集』、既出））。そして少なくとも、その鉄崖体の変相として、前後七子や公安派をとらえる見方はつとに提示されている（郭紹虞『中国文学批評史』（『民国叢書』本）。しからば、楊維楨の弟子たる瞿佑が文言小説において情を肯定的に描いていたことも、こうした流れに位置づけうる可能性があろう。入矢氏が説く〝わが明一代の独自な文学をわれらの手で創出しようという気概〟は、狭義の詩文や前後七子に限られるものではなく、戯曲や小説など他のジャンルにも向けられていて不思議ではあるまい。

（二〇〇九年十月二十一日受理、十一月二十四日掲載承認）

《牡丹燈記》與《牡丹亭》（摘要）

氏岡真士

《牡丹燈記》是瞿佑《剪燈新話》中最有名的故事之一。女主角符麗卿帶著丫環金蓮上街時，金蓮手裡提著一個雙頭牡丹燈籠。這一對牡丹花意味著甚麼呢？我們可在瞿佑的詩集《香臺集》中找到揭開其秘密的鑰匙。這部詩集載有〈上官應制〉詩一首，描述初唐閨秀詩人上官婉兒與雙頭牡丹的關係。據說，御園裡開了一個雙頭牡丹，上官婉兒應唐高宗的要求寫了一首詩，她將這對罕見的花朵比作李唐王朝永垂不朽的吉祥物。孰料後來上官婉兒背叛了唐，自把雙頭牡丹變成不祥之物，真是啼笑皆非！由此可知雙頭牡丹既是吉利物又有不祥之兆的意思。

從這首詩也可以看出瞿佑對上官婉兒的命運很同情，似乎在他心目中雙頭牡丹也象徵著上官婉兒這位女人。眾所週知，唐人喜愛牡丹，有關牡丹的種種套話也應運而生，其中一個就是解語花。這句話指的是楊貴妃，怎樣評價這位絕代佳人才好呢？這雖然很難說，毀譽參半，但她也算得上是一位悲劇的女主人公吧。總之，拿牡丹比作人並不稀罕，並且牡丹的含意很深刻，怪不得瞿佑給作品起名爲《牡丹燈記》。

上官婉兒和符麗卿有一個共同點，即她們的一輩子都是志與願違的。筆者認爲志和願之間的這種矛盾，也表現在雙頭牡丹的兩朵花上。雖然乍看《牡丹燈記》故事，瞿佑對符麗卿不以爲然，其實從整個《剪燈新話》來說，我們了解到瞿佑對符麗卿那樣由於戰亂遭到不幸的婦女寄與同情。不但如此，瞿佑好像看透了封建社會如何欺負女人，他的觀點是比較進步的。因此筆者認爲雙頭牡丹把上官婉兒和符麗卿兩個女性關係到一起也不足爲奇。

湯顯祖《牡丹亭還魂記》爲甚麼要突出牡丹呢？雖然才子佳人在後花園裡談戀愛乃司空見慣，而未婚的妙齡女郎常把春天將要結束時才開的牡丹花比作自身，也不足以見怪，但是我們還需要進一步探討。因爲這場戲有藍本《杜麗娘記》，其中之關鍵並不是牡丹，而是梅花、柳樹和人鬼成歡，這些因素到了《牡丹亭》裡卻不怎麼顯眼了。那麼，湯顯祖爲甚麼把這個沉湎於情欲的人鬼戀故事改寫爲一個富有浪漫色彩的戀愛傳奇呢？

其實牡丹花和鬼的關係不淺，難怪俗話說：“牡丹花下死，做鬼也風流”，雖然這句話本來是諷刺那些非過牡丹癮不可的人。不僅如此，我們知道有一個故事恰好描寫了牡丹和鬼的故事，那就是剛才提到過的《牡丹燈記》。筆者認爲湯顯祖受到《牡丹燈記》的啓發後才能夠對《杜麗娘記》進行大膽的改變，《牡丹亭還魂記》的杜麗娘是爲符麗卿祈冥福而重新造型的。

湯顯祖的眼光不會忽視上面討論過的那些《牡丹燈記》裡忽隱忽顯的的內涵，這位大文學家也應該同情符麗卿以及所有被世運玩弄的婦女，他又一定會欣賞瞿佑創作《牡丹燈記》這種佳作的本領，因此湯顯祖改寫《杜麗娘記》時便把牡丹花引進到裡面，代替梅花加以強調，既表示對符麗卿的哀悼，又表示對瞿佑的敬意。

按《牡丹亭》的藍本應該不是話本小說《杜麗娘慕色還魂》，而是文言小說《杜麗娘記》。關於這件事，筆者同意中國專家向志柱先生最近發表的所見。此外《剪燈新話》雖然在明代是一本禁書，不過《牡丹燈記》又見於《稗家粹編》、余公仁本《燕居筆記》以及《剪燈叢話》等書，可見湯顯祖看到《牡丹燈記》的機會到處都有。《剪燈叢話題辭》的作者虞淳熙和湯顯祖一樣是萬曆癸未（1583）進士，這種情況也值得注意。

以上所見，如有助於探索整個明代文學與情之關係，聊以爲幸。